探検！言葉の森 7

っていうか

京都教育大学教授 森山卓郎（もりやまたくろう）

「っていうか」という言葉が比較的若い世代で、文頭でも文末でもいろいろに使われることがある。「っつうかあ」のように発音されることもある。「っていうか」という形は、言うまでもなく、もともとは言い換えの表現である。あえていえば、いかに表現するかの迷いがあることを前提として、違う表現に言い換える表現なのである。だから、本来、この表現の背後には、「どう表現すればよいか」を求めようとする思いがあったと言える。

例えば、スープの味について、「しょうゆ味が強いというか、ちょっと塩加減が濃いというか、味にいくぶんしつこさがあるというか……。」などと言えば、その話し手は、味をなんとかして適切に表現しようと、必死で表現を精選しているのだ。ま、さっさと「濃すぎる」と言ってもいいのだが。

そんなわけで、評論家的な人が、「ちょっとクラシックというか、古いというか、ダサイというか……。」のように、「というか」を使ううちにだんだん本音が現れてきて表現がエスカレートすることもあるようだ。

さて、問題なのは、いわば「接続詞用法」というか、「応答詞用法」というか、まあ、文頭の用法だ。例えば、

Aさん「それはおかしいです。」

Bさん「っていうか、これでいいんじゃないですか?」

のように、相手の発言を否定するときなどにも、それとなく使われることがある。これは考えようによってはなかなか洗練された用法だと言える。実質的には相反する意見であっても、対立的な雰囲気は出にくいのである。しかし、表面を繕うあまり、論理関係が不明瞭になっているとも言える。

最近ではこれがさらに自由に使われることもあるようだ。

Aさん「この字、なんと読むの?」

Bさん「っていうか、これ、おいしい!」

みたいになってくると、相手の言葉を受け取るふりをして、その実、まったく無視して自分の文脈に強引に路線変更することになっている。ここまでくると、「何だって続けちゃう」用法とでも言いたくなる。対立を避けてるんだかあつかましいんだかわからない。っていうか、文末用法にも触れようと思ったのだが、紙幅が尽きたのでした。